

フランス語聞きとり・発音演習報告

上田 和彦

私たちティーチング・アシスタント二名（ともに大学院博士課程二年生）は、学部生（文学部フランス語フランス文学専修課程に在籍する三、四年生）のフランス語聴取力を高め、発音を矯正する演習を担当するように言われた。各人が一週間おきに異なる教材を用いること、教材の選択、演習方法などに関しては前年度を参考にすること、この二点をあらかじめ指示された。ただ、今年度の演習枠（夏学期、冬学期とも、各人各六回、各回百分）、出席者数（今年度から単位が認められることになったので増加が予想された）を考慮して、どの教材を選択し、どのように使い、どのように演習を進めるかは各人が決めるように言われた。私たちは、聞きとり、発音に関する最も効果的な教育方法を知っているわけでもなく、たとえ知っていたとしてもこの演習の枠で運用できるかどうかは定かでなかった。よって、各自が試行錯誤しながら演習のやり方を徐々に固めて行かざるを得なかった。以下、私が担当した演習においてどのような問題が生じ、それにどのように対応しながら演習を進めていったかを具体的に報告する。

最初の授業では、出席者が聞きとりと発音においてどれくらいの能力を持っているかを調べるために、とりあえず『リンガフォン』初級第十課⁽¹⁾を聞かせてみた。すると、おおまかな内容も理解できない者が多数を占めていた。また、テキストを音読させると、ごく大雑把な調音もできず、リエゾンに関する最小限の規則も守れない者が多く見られた。聞きとり、発音に対してこれまであまり関心を持っていなかったことがうかがわれたため、まずフランス語の音一般に興味を起こさせなければならないと考えた。類音の聞き分けができないため、あるいは、弁別しやすい発音ができないために誤解が生じ、痛い目に

あったことがない者は、音節の水準だけでの聞き分け・調音練習の必要性を身に沁みて感じないかもしれない、むしろ、退屈するかもしれない。出席者は書かれたフランス語を読解する授業に慣れている。皆の前で誤読しないように常に神経を尖らせる習慣がある程度身につけている。そこで、文章の意味を聞きとることに重点を置き、その過程において、どの音、或いは、どのような音の連なりが聞きとれなかったために意味が理解できなかったかを問題とすることから始め、類音の聞きとり・調音への関心を徐々に高めていくという方針を設定した。演習回数、時間が少ないため、一つの教材が呈示する方法に則って全課を踏破することは断念せざるをえなかった。従って、教材⁽²⁾は、五十行程で話が完結し、かつ内容が比較的面白い箇所を随時選びだして利用することにした。

演習の進め方は、出席者（ほぼ二十名）に二、三度接するうちに、ほぼ次のように固まった。まず全文を一度とうして聞かせ、聞きとれただけの内容を日本語で言わせてみる。席順に従って当ていき、ごくおおまかな内容が明らかになるまで続け、もう一度全文を聞くときの手助けを与える。たとえば、『ディアボロ・マント3』第三課、a, b⁽³⁾を使用したとする。何の説明もしないで全文を聞かせ、「何の話をしていましたか」と順次質問していき、「リセの生徒たちが、どの様な職業に将来つきたいかを話し合っている」という程度の内容が皆に明らかになるまで続ける。こちらが期待しているよりも具体的に「最初に女の子が看護婦になりたいと言い、次に...」と答える者がいる時は、一般的に要約させ、次の段階以降に詳しく答えてもらうことにする（演習第三回目ぐらいまでは、何の話をしているかさえ分からない者が多数を占めていたため、こちらから話のあらましを教えた。回を重ねる毎に聞きとれる者が増えていき、また、誰がよく聞きとれるかも分かってきたので、聞きとれない者から順に当てていくことにした）。次にもう一度全文を聞かせ、より詳しい内容を言わせてみる。先の教材の場合⁽⁴⁾、何になりたいかを明言する八名の名をテープを聞かせる前に黒板に記しておき、各人が望む職業が何かを答えさせる。聞きとれていた者にはどんな単語を使っていたかを答えさせ、聞きとれていない者に次の聞きとりの手助けを与える。更にもう一度全文を聞かせ、更に詳しい内容を言わせ、聞きとれていた者には、文をできるだけ再現させてみる。この段階では、聞きとれた内容を全て答えさせる。先の教材の場合⁽⁵⁾、Gérard

がなぜ国際機構で働きたいと言っているか、どの様な構文、いかなる単語を使っているかなど、しつこく質問していく。そして、*Moi, j'aime mieux voyager. Je vais essayer de trouver un poste dans une organisation internationale.[...]等*をフランス語でできるだけ再現させる。このように質問に答えさせることで話の内容をおおよそつかませたあとで、今度は全ての単語を聞きとらせる。各人に対して一文だけを聞かせ、聞きとれた語を言わせ黒板に記してゆき、文が完成するまで何度も繰り返す（この時、他の者には各自のノートに書きとるように指示する）。ここで最も時間を費やし、全ての音に耳をそばだてさせ、どの音、どのような音の連なりが問題であったかを分からせるよう努力した（ただ、類音の聞き分けにまで注意を払わせることは困難であった。というのも、出席者達にとっての第一の障碍は、語意を知らない単語が数多く在ることであったからだ。先の教材の場合⁽⁶⁾、*cadre* の管理職と言う意味、*boulot*、*rigoler*、*se débrouiller* の意味を知らないため、音までうまく聞きとれない者がいた。第二の障碍は、エリジオン、アンシェヌマン、リエゾンの箇所であった）。一文が完成したところで、その文を音読させ発音を矯正する。全ての者に順次当てていき、ふたまわり程したところで全文の聞きとりと、書きとりが終わる。そこで、もう一度全文を聞かせると同時に録音させる。聞きとりにくかった箇所に印を付けさせ、自宅で何度も聞くように厳しく言う。

全過程で、少なくとも三、四回は全員に順に当て、時々順番を無視して答えられそうな者に当て、緊張感を持続させるようにした。他方、クイズに答えるような雰囲気、特に大まかな聞きとりの時には、つくろうと努力したので、正解を答えた者には喜びの表情も見られた。テープを何度も聞きなおして、一文全ての語を聞きとった時には満足そうな表情をする者もいた。少なくとも授業中においては、音に耳をそばだてる習慣はついたように思える。実際、回を重ねる毎によく聞きとれる者が増えた。しかしながら、反省すべき点は数多く在る。当初、音節の水準での類音の弁別が頻繁に問題となるところまで行き、特別な練習の必要性を感じさせたいと思っていた。もし類音異義語が頻出するようなテキストを捜し出すことができたならば、うまく利用できたかもしれない。また、音節の水準だけで類音を区別して調音する練習だけは独立して行ったほうがよかったとも思う。しかし、十五～二十名が出席したため、文を読ま

せて発音を矯正する時間も充分にはとれなかった。さらに、日々フランス語を聞く習慣を身につけるように何度も言いはしたが、夏学期は宿題を出すことをしなかった。やるかやらないかは個々人に決めさせることにして、とりあえず、課題を与える配慮はすべきではなかったかと思う。なお、夏学期の終わりに書きとりの試験を行った。綴りに対する注意が欠けている者が多かった。冬学期になってから、授業では用いなかったテキストを録音させ、書きとりを宿題とし、期限を設けず自分のペースでやってくるように言っている。

フランス語教育の現場に初めて立ったため、手探りしながら授業を進めて行かざるをえなかった。出席者を戸惑わせることが多々あったかもしれない。ただ、この授業を通して、いかなる単語が聞きとりにくいか、いかなる単語が発音しにくいのかを少しでも知り、また、これらの困難をいかにすれば克服することができるかを考える機会を得ることができた。今後も反省を重ね、次の現場に備えたい。

(1) *Linguaphone; cours de français*, London, The Linguaphone Institute, 1971, p.72, 73.

(2) 夏学期は*Linguaphone; cours de français*を、冬学期はLandgraaf et Bazin, *Diabolo Menthe 3, Méthode de français*, Paris, Hachette, 1991を利用した。前者は、確かに聞きとりやすいが、話し方、話の内容が人工的である。後者は、より自然である。若者たちの日常的な会話を模倣したものが数多く録音されており、話し言葉が頻出する。また、ラジオ放送の模倣、文学作品の朗読、モノローグ等も録音されている。夏学期のはじめこそ、出席者の大部分は前者の聞きとりにすら困難を覚えていたが、終わり頃には随分と慣れよく聞きとれるようになり、逆に退屈する者も見られた。そこで冬学期は、実際の会話により近いものを聞きとらせようと思い、後者を利用した。

(3) Landgraaf et Bazin, *op.cit.* p.15,17.

(4) *Ibid.*, p.15,17.

(5) *Ibid.*, p.17.

(6) *Ibid.*, p.17.